

おんだし 押出遺跡 (第4次)

遺跡番号	381-313
調査回数	第4次
所在地	山形県東置賜郡高畠町大字深沼字押出
北緯・東経	北緯 38 度 1 分 47 秒・東経 140 度 10 分 16 秒
調査委託者	山形県教育委員会
起因事業	農林水産省東北農政局米沢平野農業水利事業所 国営かんがい排水事業 (米沢平野二期)
調査面積	665 m ²
受託期間	平成 23 年 7 月 19 日～平成 24 年 3 月 31 日
現地調査	平成 23 年 10 月 3 日～11 月 18 日
調査担当者	水戸部秀樹 (現場責任者)・伊藤大介・高木茜・濱田純
調査協力	高畠町教育委員会 農林水産省東北農政局米沢平野農業水利事業所
遺跡種別	集落跡
時代	縄文時代
遺構	住居跡・盛土遺構・転ばし根太・打ち込み柱・窪地
遺物	縄文土器・石器・木製品・種子・骨器 (文化財認定箱数: 207 箱)

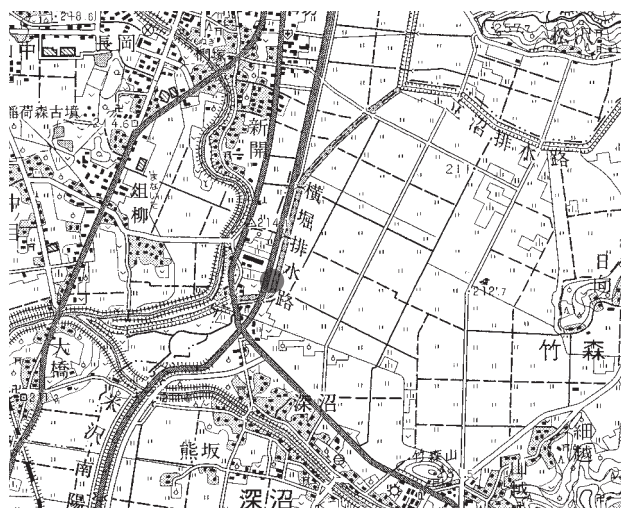


図1 遺跡位置図 (1:50,000)

調査の概要

押出遺跡の発見は、1971年に沼尻堀を掘削した時の排土から、土器や石器が拾い上げられたことが契機となった。1985年からは、国道13号建設工事を起因として3カ年におよぶ発掘調査が行われ、大きな成果が得られている。地表から約2m下に、特殊な構造をもつ住居群、通常の遺跡では残りにくい有機質遺物、彩漆土器や木胎漆器などを始めとする貴重な遺構・遺物の数々が発見された。その重要性は、約1,100点におよ

ぶ出土品が、国指定重要文化財となったことからもうかがえる。今回の第4次調査でも、小さい面積の調査区にもかかわらず、前回の調査成果に類する重要な遺構・遺物が確認された。

押出遺跡は^{おおやち}大谷地と呼ばれる湿地帯の中に位置している。現在では開拓され、どこにでもある水田が広がっているが、かつては舟を使って田植えを行ったほどである。大谷地周辺には、縄文時代の遺跡が数多く知られており、生活に適した環境であったと考えられるが、果たして湿地帯の内部に集落を構えた押出遺跡の暮らしぶりはいったいどのようなものだったのだろうか。

遺構と遺物

第1～3次調査では住居跡39棟、集石遺構1基が検出された(図2・写真6)。今回の第4次調査では、沼尻堀の西岸部から、4棟の住居跡や多数の遺物が見つかった。沼尻堀の堀底も遺跡の範囲内ではあったが、掘削工事が遺跡の下までおよんでいたため、ほぼ全てが失われていた。住居跡は前回の調査でも見つかった盛土をもつものである。住居1・2は大きさは異なるが、構造は同じである。盛土の下に転ばし^{ねだ}根太とよばれる丸太材が、縦横に敷き詰められている。柔らかい地盤に住居を

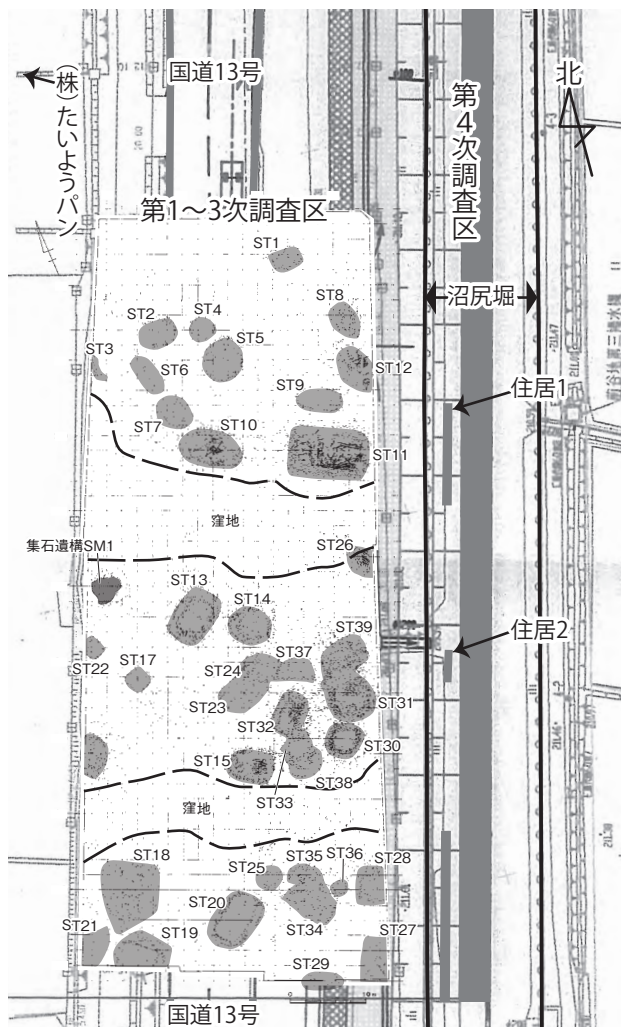


図2 調査区概要図 (1/1,000)



写真1 住居1検出状況 (北東から)



写真2 住居1の盛土断面 (南西から)

建てるための工夫であると考えられる (写真1・3・5)。盛土は、砂や粘土を交互に積み重ねて造成されていた(写真2・4)。また、盛土の周囲には壁柱と考えられる多数の柱が打ち込まれている(写真1・5)。これらの遺構から、当時の住居を復元すると、図3・写真7のようになると考えられている。今回の調査では、幅1m分のみの検出となったため、全体の状況ははっきりしないが、本来は、写真6のように、敷き詰められた転ばし根太の周囲を打ち込み柱列が楕円形に巡る構造になるであろう。



写真3 住居1中央部検出状況 (北から)



写真4 住居2の盛土断面（南西から）



写真5 住居2検出状況（北東から）



写真6 3次調査の15号住居跡（東から：文献1より）

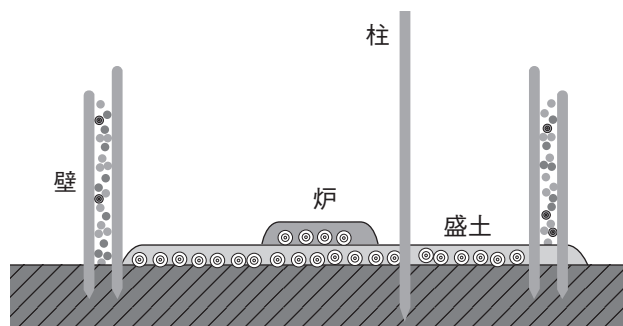


図3 住居下部構造模式図（文献1より）

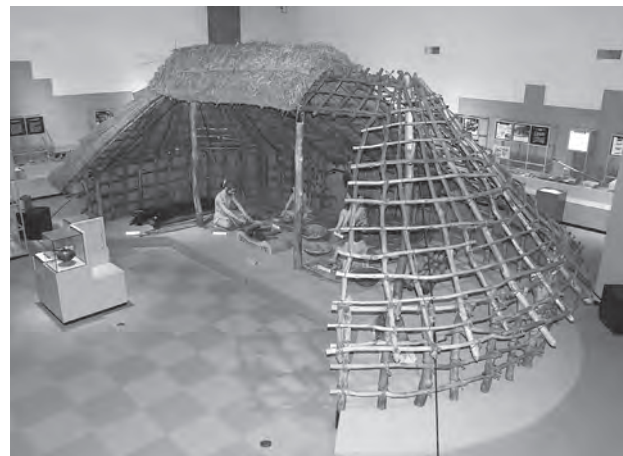


写真7 20号住居跡復元模型（文献1より）

出土した遺物には、多数の縄文土器（約5,500年前・写真8～10）、石器、木製の皿などがある。漆が塗られた土器や木製品、クッキー状炭化物などは出土しなかった。土器の大半は、東北地方南部の土器型式である粘土紐を貼り付けた曲線的な文様が特徴の大木4式期のものだが、一部他地域（新潟方面など）の土器型式も出土しており、人・モノの交流がうかがえる。石器は、石鏃、押出型ポイント（写真11）、石匙、石錐、異形石器（写真12）、磨製石斧、凹石、石皿などが見つまっている。押出型ポイントは本遺跡で特徴的な石器であり、



写真8 住居1 土器出土状況（北東から）



写真9 土器出土状況（南東から）



写真10 土器出土状況（南西から）



図4 ある日の押出ムラ（文献1より）

湿地に生えるヨシなどを刈り取るために使われたと考えられている。また、異形石器は、他の石器と異なり赤色の鉄石英を素材として多用していること、さらにその形態などから、実用品ではなく、祭りなどに使われた可能性が高い。ほかに食料となったクルミの殻が大量に出土した。

まとめ

当時の押出遺跡の様子は、図4のように想像されている。湿地に適応した住居や石器などを用いているが、その暮らしぶり、積極的に湿地を選んで住んだのか、あるいは、ほかに住む場所がなかったのかで大きく変わる。見つかった多種多様な遺物、特殊な住居跡からは、何らかの目的があって、積極的に湿地へと進出していったという可能性にも、考えを広げてみる必要があるのではないだろうか。

引用文献

文献1：山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
2007 『押出遺跡』



写真11 押出型ポイント



写真12 異形石器